

# 和を乱さず、水を取り合う。 湖北の習俗に見る 先人の知恵。

扇状地を流れる高時川流域は昔から干ばつに弱い地域でした。雨が少ないと高時川で瀬切れが起き、水の利用に不便をきたします。一方、昔から私たちの「食」の中心で「財」の根源は「米」。これをつくるためには豊富な水が欠かせません。まさに「水を制する者がその地を制する」わけで、「いかにしてこの水を手に入れるか」という先人たちの熱い思いの歴史でした。

【お話を伺った方々】



片桐 邦男さん  
かたぎり くにお  
大正13年  
高月町生まれ



狩野 武士さん  
かの たけし  
大正9年  
湖北町生まれ



橋本 章さん  
はしもと あきら  
市立彦根城歴史博物館 学芸員



小川 安清さん  
あかわ やすきよ  
彦根地方気象台 技術課長

写真及び資料提供：高月町高月区  
水土里ネット湖北  
彦根地方気象台

## 昭和時代 (1912~)

昭和39年河川法改正。利水関係規定の整備



切り穴。タタキ、落し口とも呼ばれた。(※2)

## 大正時代 (1912~)

工業の発展や都市の拡大により、新たな米需要が拡大し、食糧増産政策が推進される。かんがい排水が大々的に行われる。



前田俊蔵の霊を祀る碑(高月町高月)  
明治16年夏の出来事。俊蔵享年28歳。碑は高月町高月の大円寺境内にある。(※1)

## 明治時代 (1868~)



大井立会  
高月町高月  
大正11年  
高月町生まれ



豊島池(豊清町)  
豊島作右衛門が作ったといわれる藩池。(神田藩とも呼ばれる)



大蔵久兵衛掃子の顕彰碑  
雨森の庄屋であった大橋氏は、水争いが起った時豊島池を築き、その解決にあたり、しかし、非業の死を遂げた。

## 江戸時代 (1600頃)

治水技術を普及させた沖積平野の新田開発が進む。



清介氏の石障(虎姫町中野)  
清介氏は水争いの罪を一人で引き受けた、と言われている。



世々開長者流水運功碑  
世々開長者は餅之井を造るために尽力した、と言われている。

## 戦国時代

戦国大名による水田開発が進む。



公地公民主義が後退し、荘園制が始まる。

## 奈良時代

公地公民主義が後退し、荘園制が始まる。



桑里神の跡(湖北町二股や丁野周辺)

## 古墳時代

国家による農地や水利の整備が進む。



井堰とは、農業や生活に欠かせない水を安定して得るために川の中に設けられた構造物のことです。

## 弥生時代

鉄器の普及により、池や溝の建設が可能となる。



縄文文化の伝来。縄地を中心とした耕作。

## 縄文時代

縄文文化の伝来。縄地を中心とした耕作。



大海道遺跡(高月町持寺)

## 太鼓踊りも濁水への備えだった

水を確保するためには命もかける。それほど先人たちの水への思いは強いものでした。高月町・片桐邦男さんが祖母から聞いた話によりますと、昔、高月の人たちが干ばつで困り切っていたとき、前田俊蔵(写真参照※1)という人が一週間かけて夜叉が池へ行き、雨乞いをしたそうです。「この命を捧げますから、どうか雨を降らせてください」と祈願、高月へ戻るやいなや大雨が降ったと言います。前田さんは神との約束を果たすため、龍神を祀った森で喉を突き、腹を切つて命を絶ちました。8月23日が命日で、この日は今でも大抵雨が降ります。

濁水の恐れは昔も今も変わりません。現に今年も4月から6月にかけて少雨が続き、彦根地方気象台が2回にわたって「少雨に関する滋賀県気象情報」を発表したほどです。例えば第2号(6月27日発表)によると、滋賀県では4月以降降水量が少なく、この状態が今後一週間程度続く見込みで、水の管理や農作物の管理などに注意を呼びかけていました。その中で降水量の速報値として、彦根では4/1~6/26間で183.5mm・平年の41%、6/1~6/26間で39.5mm・平年の25%と少雨でした。幸い、7月初めにまとまった雨が降ったため事なきを得ましたが、あのままの状態が続けば農作物に被害が出たものと見られています。「天気予報のうち最も予報が難しいのが梅雨の時期の天気」(彦根地方気象台・技術課長・小川安清さん)だけに、普段から濁水対策に力を入れておく必要があります。

年	4月	5月	6月	7月	8月
平均値	133.4	138.9	207.4	202.6	127.7
大正11年(1922年)	96.0	68.1	74.4	151.3	61.0
昭和14年(1939年)	110.1	55.7	134.7	53.1	28.3
昭和53年(1978年)	144.5	73.0	258.0	61.5	44.0
平成6年(1994年)	102.5	129.5	105.0	41.0	37.0
平成17年(2005年)	41.0	103.0	72.5	274.0	142.0
平均値との比較	31%	74%	35%	135%	111%

※平均値：明治27年~平成15年までの110年間

実際、湖北の先人たちは年間通じて濁水対策に力を入れてきました。湖北に伝わる数多い太鼓踊りもその一つです。「雨乞いの踊りなのに、水をそれほど必要としない8~10月に実施されるものが大多数

です。なぜでしょうか。建前は雨が降ったことへの返礼の踊りですが、隠された狙いが『示威行動』にあつたからです。例えば、湖北で最大規模の太鼓踊りでは、長浜から姉川上流の伊夫岐神社まで郷里庄13か村の太鼓踊りの隊列が押しかけて踊りました。「これだけの人たちが下流に住んでいるんだぞ。水をよこさないといえらることになるぞ」と上流の村々を示威、毎年、濁水になる前から一種の水争いを始めていたとも言えますね(市立長浜城歴史博物館学芸員・橋本章さん)

## 井落としは濁水時の共存共栄の知恵

同じように、水を取るため上流にある井を下流の人たちが切つて水を流す「井落とし」も一種の示威行動で、互いを認知するための共同作業によって、本当の流血の惨事を避ける先人たちの知恵でもありました。

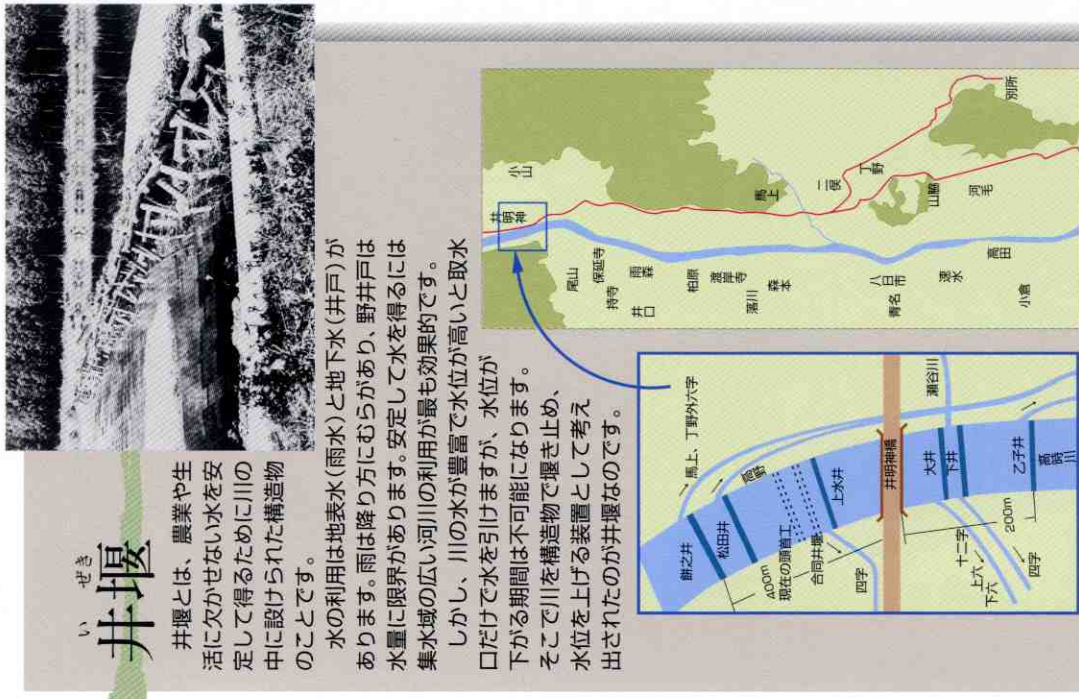
井落としに実際に一回参加したことのある湖北町丁野の狩野武士さんは語ります。

「餅之井を切る側は白装束で押しかけて、井を守る側は黒装束に身を固め待つ。まるで喧嘩のような形を取りますが、実はどの地域がどれだけ水が無くて困っているかを各地の番水(順番を決めて水を分配する。番水制)を細かく相互チェック、事前に打ち合わせてお互い了承のうえやるのです。堰には1カ所だけ普段から幅13尺(約4メートル)の切り欠け(写真参照※2)が設けられていて、そこを切ります。切つた人たちはできるだけゆつくりと歩いて井明神橋まで戻ります。下流側が井明神橋まで戻ったら上流側は井を直してよかつたからです。その間だけ「一落とし千反」の水が流れて農業用水となるのです」

## 水の出入り口を押さえた者が支配者に

高時川は滋賀でも有数の井の多い川でした。「本来なら1つの「井」から網の目状に各地へ水を引けばいいのですが、そうはできない事情があつたからです。昔は水の出入り口をにぎつた者がその地域の支配者になりました。豪族の支配地域をまたいで流れる高時川は支配関係が複雑なうえ時代と共に変化、うまく解決できないのでたくさん作らざるを得なかつたのです。いわば、水を取り合いした挙げ句の状態が「井の乱立」だといえるのです(橋本章さん)

井の乱立、井落とし、太鼓踊り。いずれも水に苦勞した地域故に生まれた社会システム。いかに水が大切だったかの証です。



## 井堰

井堰とは、農業や生活に欠かせない水を安定して得るために川の中に設けられた構造物のことです。水の利用は地表水(雨水)と地下水(井戸)があります。雨は降り方にむらがあり、野井戸には水量に限界があります。安定して水を得るには集水域の広い河川の利用が最も効果的です。しかし、川の水が豊富で水位が高いと取水口だけで水を引けませんが、水位が下がる期間は不可能になります。そこで川を構造物で堰き止め、水位を上げる装置として考え出されたのが井堰なのです。

